

上代日本語連濁論のアポリア

工藤 力 男

はじめに

早く目覚めた日曜日の朝は、寢床の中で、六時から始まるラジオ第二放送の「古典講読」の再放送を聴いて過ごすことがある。令和四年度は萬葉集の講読であった。

令和五年二月十二日は、巻第三の大伴家持の作歌をめぐる講義で、急死した安積皇子^{あさかのみこ}の死を悼む挽歌が扱われた。その二タ組の長反歌のうち、あとの長歌の読み方が耳に残った。その歌の前半を岩波文庫版『万葉集』第一冊から引き、必要な振仮名を残して掲げる。なお、萬葉歌からの引用には、『国歌大観』の歌番号を洋数字にかえ、丸括弧で挟んで示す。他の文献などの刊行年は、亀甲括弧内に洋数字で示す。

かけまくも あやに恐し^{かしこ} わが大君 皇子の命^{みこのみこと} ものの
 ふの 八十伴の男^{やそとものをとこ}を 召し集へ^{よびあつ} あどもひたまひ 朝狩
 に 猪鹿踏み起こし^{しし} 夕狩に 鶉雉踏みたて^{うす} 大御馬の^{おほみま}
 □抑^{おさ}へとめ……(478)

わたしの耳に聞いたのは、右に太字で示した二箇所での読みである。ラジオの朗読では、アサカリとユウカリ、第三拍は清音「カ」だったからである。

アサカリ・ユウカリの音列からわたしが想起する語は、「麻刈」や外来植物「ユーカリ」であって、共にここの歌にはそぐわない。岩波文庫版では、その振仮名は「あさがり」「ゆふがり」、濁音「ガ」である。

ラジオの講義に用いたテキストが何によるかは明かされていないが、講師は東京大学の鉄野昌弘教授である。鉄野氏は、

師である稲岡耕二氏の読みを採用しているのではないか。そう推測して、稲岡氏が注釈した、和歌文学大系『萬葉集(一)』[明治書院 1997]を開いて見た。すると、「あさかり」「ゆふかり」の振仮名がある。無論、鉄野氏が稲岡氏の著書をテキストに選んだとは断定できないが、考える手がかりにはなるだろう。

ついでに、同書の他の箇所を見ると、巻第六の山部赤人作歌(996)では、「朝鴛」「夕狩」に、それぞれアサガリ、ユフガリと連濁形で附訓している。そのほか、歌番号を括弧書きして挙げると、「朝鴛」(9)、「朝鴛」(4011, 4257)はアサカリ、「暮鴛」(3)、「暮鴛」(4011)はユフカリと清音形で読んでいる。なお、東歌を集めた巻第十四の巻末近くにある防人歌五首のうちの一首(3568)に見える「安佐我里」には、「あさがり」と振仮名している。

とかく連濁は難しい。萬葉語の朝狩・夕狩にも二つの読みが可能だ、という人もあるかもしれない。一方、萬葉歌の表記や訓法に関心を寄せる人の感想は違うだろう。稲岡氏は一昨年長逝したが、萬葉集、特に柿本人麻呂とその歌集の表記と訓について、多くの精緻な論考と著作を残した人でもある。その人が、アサカリ・アサガリとも、ユフカリ・ユフガリと

も附訓していることをどう考えたらいだろうか。

1 本稿の意図

本稿では、通行の萬葉集のテキストや注釈書にあつて、いくつかの複合語の読み方に連濁形と不連濁形が混在していることの意味について考える。なお、連濁しないことについて、世上には「非連濁」の語が通用しているが、わたしは「不連濁」を用いる。

萬葉集の歌の用語について連濁の問題を細かく論ずるようになったのは、さほど古いことではない。例えば、日本古典文学大系の『萬葉集』四冊[1957～1962]は、上代特殊仮名遣の知見を駆使して、萬葉歌や上代日本語の解釈に多くの新見を提供したことで知られている。その巻第一、柿本人麻呂による二群四首の通称「吉野讚歌」(36～39)に「山川」が三回出現するが、振仮名は一つもない。見開きの対照ページにある原文は無訓なので、厳密には読み方が分からない。歌意によって明らかだというのであろう。

無論、この件に細心の意を払う研究者もあつた。管見では、右の古典大系本より廿数年早い、山田孝雄著『萬葉集講義

巻第一』〔再版 1931〕がその一つで、右掲の吉野讚歌の第一首に左記の注がある。

○山川之清河内跡 「ヤマカハノキヨキカフチト」とよむ。山と川とを併せていへるなれば、「カハ」を清音にてよむべし。(以下略)

同じ萬葉集を対象に発言するにしても、文学的に論ずる人はこの件に無関心である傾向が強く、語学的に論ずる人は細かな注意を払う傾向が強いのは当然である。

わたしは、奉職した三つの大学で国語学を講じてすごした。そのかたわら、縁があつて、四十代の半ばから、岩波書店の萬葉集関係の書物の刊行に関わることが続いた。『校本萬葉集 新增補版』、その第三次増補修訂版、新日本古典文学大系『萬葉集』(以下、新大系版と略記)、そして岩波文庫版『万葉集』(以下、文庫版と略記)である。文庫版は、版元に在庫が乏しくなつて増刷が決まるたびに、訂正の機会が与えられる。編集部の本音は、できることなら訂正なしで増刷したいのだが、執筆者としては、一つでも誤りを正し、一ミリでも前進したいので、行数の変わらぬ範囲での訂正を頼みこむことを繰り返して、今日に至っている。

文庫版の執筆者は五人、わたしは生存する三人の内の最年

長者で、齢は八十路半ばに達して余命もおぼつかない。第一分冊の刊行からちょうど十年、特に気がかりな箇所について所見を明らかにしておきたいと強く思う。四千五百余首の歌についての共同作業なので、改めて読み直すと、不統一な記述や矛盾した見解があれこれと見つかる。根拠の定かならぬ訓や注もある。そのような箇所について、まだ緻密な考証は経ていなくても、僅かな可能性にすがつて発言する方がいいこともあるだろう。本稿は、そうした事がらのうち、連濁に限って卑見を開陳する作業の一つである。

日本語の連濁に関する発言や研究の歴史は、近年、鈴木豊氏の「連濁」の呼称が確立するまで——連濁研究前史——〔早稲田大学国文学会『国文学研究』142 2004〕や、屋名池誠氏の「ライマン氏の連濁論 原論文とその業績について」〔『百舌鳥国文』11 大阪公立大学 2019〕といった貴重な労作が見られるようになった。

「連濁」を書名に冠する大部の専書も公刊された。佐藤武義・横沢悦利氏の『連濁の総合的研究』(勉誠出版・2018)であり、平野尊識氏の『連濁の規則性を求めて』(ひつじ書房 2014)である。肥爪周二氏の大著『日本語音節構造史の研究』(汲古書院 2019)は、七百ページ近い著書の三分の

一を「清濁論」に割き、日本語史を俯瞰する視点から細部まで論じている、高山倫明氏の『日本語音韻史の研究』（ひつじ書房 2012）も大局的な考察に秀でた論で、教わるどころが多い。

以下、あまたの研究者の業績に助けられて、萬葉歌の読み方をめぐるささやかな思索の跡を記すことにする。

2 朝狩・夕狩

本稿執筆のきっかけになった萬葉語に戻る。

萬葉集には朝狩の用例が六つ、夕狩のそれが四つ認められる。そのうち、両語を対句にしているのは二つである。「カリ」の原文は、意字表記の「狩・獵・獺」のほか、前掲の防人歌五首の中に音仮名表記の一例がある。その歌の原文を残した形で引く。

後れ居て恋ひば苦しも**安佐我理**の君が弓にもならましも
のを (3588)

この巻の防人歌には東国語の特徴が見えないので、「アサガリ」を東国語と限定して考える必要はないだろう。

文庫版の前身である新大系版の読み下しでも、朝狩・夕狩

は「アサガリ・ユフガリ」と読み、特に注を付けてはいない。かかる点に細かい注を施す傾向の強い新編日本古典文学全集（以下、新編全集と略記）の『萬葉集』もすべて濁音であって、注はない。

いま、名詞を「X」として、「Xカリ」の形の上代語を探してみると、訓字表記の「蘆刈」〔1559〕に「アシカリ」の訓が行われている。「朝狩」と同音になる連濁形の「麻刈り」も不連濁形の「麻カリ」も、上代文献には見あたらない。「麻刈り」を『日本国語大辞典』第二版に求めると、江戸時代の俳諧書から、「白雄句集」〔1793〕・「暁台句集」〔1809〕の用例を、「アサカリ」で挙げている。

萬葉集から「朝+《名詞》」の複合語を探すと、仮名表記の確かな例として、「朝ギリ」と「朝ガホ」がある。ほかに、意字表記の「朝霞」九例、「朝曇」一例、「朝東風」二例があり、それぞれ、朝ガスミ・朝グモリ・朝ゴチと、連濁形の訓が行われている。いずれも前項「朝」による連体修飾の構造で、後項の語頭は連濁形「ガ・グ・ゴ」に変化しており、「朝のX」から消えた連体助詞「の」の代役を濁音が務めているごとくである。

かくして、朝の狩は「朝ガリ」が最も自然な語形だという

ことになる。因みに、現在通行の大部の辞典を見ると、小学館『古語大辞典』、『角川古語大辞典』、東京大学出版会『古語大鑑』ともに、「あさがり」の語形で掲げている。小学館『日本国語大辞典』は「あさがり」で掲げて、語義記述に「〔あさがりとも〕」を加えており、小型辞典の三省堂『詳説古語辞典』は「あさがり」で掲げて「あさがりとも」としている。

3 したはへ／したばへ

本節では、言及する六首の歌に丸囲みの番号を振る。

①には、巻第九の田辺福麻呂歌集から出たという長歌「娘子をとらを思ひて作りし歌一首」の冒頭を引いて、言及箇所在庫庫版の原文を括弧書きする。

① 白玉の 人のその名を なかなかに 言ことを下延したはへ（辞

緒下延）(1792)

第四句の原文の「下」は、鎌倉時代の写本である西本願寺本に「不」とあるが、平安時代の写本の文字を採ったものである。文庫版の現代語訳に「言葉には出さずに」とあり、「下延へ」を動詞の連用中止法と解釈したことが分かる。

続けて、同巻の巻末、高橋連虫麻呂歌集から「菟原うなひ処女をとめの墓を見し歌一首」の第三十九句以下の四句を、①と同じ要領で掲げる。

② 隠こもり沼ぬの 下延したはへ置きて（下延置而）うち嘆なげき 妹いもが
去いぬれば (1809)

「隠り沼の」は動詞「下延へ」の枕詞で、続く句は「心ひそかに思い、」と訳されている。

次の二首は巻第十四の東歌で、原文は全体が万葉仮名で書かれている。

③ 足柄みまぶの御坂みさかかしこみ曇り夜の我が下延したはへを（志多婆倍乎）言出ことつるかも (3371)

この歌の「したばへ」は連体修飾語「我が」をうける名詞である。

④ 夏麻なつそび引く字奈うなひ比をさして飛ぶ鳥の至らむとそよ我が下延したはへし（之多波倍思）(3381)

この歌の第三句以下は、「飛ぶ鳥のように、あなたの所へ行きて着こうと、私はひそかに思っていたことだよ。」と現代語訳されており、結句の「下延へ」には、「人知れず思い続けること」の注がある。

残る⑤と⑥はともに大伴家持の作歌に見える。

⑤ さ百合花ゆりばなゆりも逢はむと下延したはふる（之多波布流）心し

なくは今日も経めやも（4115）

⑥ 住吉すまぎの浜松が根の下延したはへて（之多波倍豆）我が見る小

野の草な刈りそね（4457）

ともに動詞としての用例ながら、⑤は不連濁形「したはふる」、⑥は連濁形「したばへて」と附訓している。

以上の六例の言及箇所を再掲する。

① 辞緒下延（ことをしたはへ）

② 下延置而（したはへおきて）

③ 阿我志多婆倍乎（あがしたばへを）

④ 阿我之多波倍之（あがしたはへし）

⑤ 之多波布流（したはふる）

⑥ 之多波倍豆（したばへて）

①と②は意字表記で、動詞の連用形「したはへ」と読まれている。③は名詞「したばへ」、④は動詞「したはへ」で、第三拍の清濁が異なる。⑤と⑥はともに動詞であるが、連濁形と不連濁形に分かれている。

万葉仮名「波」と「婆」は厄介な問題を抱えているが、わたしは、ここに引く、『萬葉集全注』巻第二十〔1988〕の⑥に関する語注が有益だと考える。著者は木下正俊氏である。

元・類・春など非仙覚本及び寛元本系諸本に「之多婆倍豆」とあり、西・陽などの仙覚文永本のみが「之多波倍豆」とある。体言としては「阿我之多婆倍乎」（14・三七一）のように連濁するが、活用語としては「阿我之多波倍思」（14・三三八一）、「之多波布流」（18・四一一五）のようにハは清音である。そのことを考慮して「波」とある文永本を採ったが、漢音では「婆」を清音に発音することもあるため、元などに拠ることも一考に値する。

この二つの仮名の扱いに苦慮したほどが知られるが、結局、木下氏の選択した仙覚文永本の本文を良しとすべきだ、とわたしは考える。

我が関心は、主に動詞「したはふる」と、その連用形名詞「したばへ」の関係にある。③の名詞を「したばへ」と読むなら、もとの動詞も、第三拍を濁音の「ば」と読んでいい、という判断もありうるはずだからである。

ここで視点を現代語に向けてみよう。例えば複合動詞「通りかかる」に対して、その連用形名詞を「通りがかり」と言うように、動詞は不連濁形、名詞は連濁形ということがある。近年は、その連濁形の名詞から作られた動詞「通りがかり」

の用例もある。言わば、動詞の二重形である。

中世、複合動詞「乗り換ふ」に対して、予備の乗物としての馬、あるいはそれを扱う役の者を「乗りがへ」と称したことが、往来物や節用集などから知られる。複合動詞「着かふ」の連用形名詞「着がへ」も似たような状況にあった。

『三省堂国語辞典』第八版(2022)は「きがえる」「着替える」の項に「もとは「きかえる」。「きがえる」は戦前からあり、一九六〇年代には優勢になった。」としている。

かくて、わたしは、⑥に関する『萬葉集全注』の趣旨を容れ、仙覚文永本の原文「波」を採って、「したはへて」の訓を採用したい。当面の六例について、動詞は「したはふ」、その名詞形は「したばへ」とすべきである。

4 ミ語法と連濁

小倉百人一首の「秋の野のかりほの庵の苦をあらみわが衣手は露に濡れつつ 天智天皇」の傍線部のように、名詞を「を」で受けて「形容詞型活用語の語幹+み」に続く形は、原因や理由を表現したり、並列表現に用いられたりする。一般に「ミ語法」と呼ばれるこの形式は、音数律の関係である

う、「を」のないことも多い。上代に盛んであったこの語法は、平安時代以後も和歌の世界には用いられた。

萬葉集の巻第三、山部赤人が明日香の神岳かむまかに登って作った、廿五句から成る長歌の第十一句からの八句を引き、言及しようとする句だけを太字の原文で掲げる。

明日香の 古き都は 山高三 川とほしろし 春の日は
山し見がほし 秋の夜は 川しさやけし(324)

この表現は萬葉集に現行の訓で十回ほど出現する。「み」は原文で「三・美・見」で書かれるほか、無表記の五箇所では「み」が補読されるか、ミ語法ではなく形容詞の活用語尾「く」で読まれるかしている。

田辺福麻呂歌集に出ているという、巻第六の「春の日に三かほ香原の荒墟を悲傷して作りし歌一首短歌を并せたり」の第三句は、ちよつと異質なので考察の対象からははずすが、続く句とともに太字の原文で掲げておく。

三香の原 久邇くの都は 山高 河之瀬清 住みよしと
人は言へども ありよしと 我あれは思へど(1059)

これには、「たかみ・きよみ」「たかく・きよみ」「たかみ・きよし」などの訓が行われており、新大系版・文庫版は「たかく・きよし」であって、ミ語法では読んでいない。

さて、「山高み」について、自分の関わった新大系版と文庫版には、困った事実のあることが判明している。巻第七の短歌(1329)の初句と第二句は「山高み 夕日隠奴」のように、濁音「だ」で仮名づけされている。萬葉集の当該歌以前までの四つの「山高み」(324, 909, 1005, 1039)は清音で「やまたかみ」と読んでいたのに、この歌に至って濁音「だ」に変わっているのである。この事情について、新大系版の当該歌に左記の脚注がある。

▽初句の原文「山高」は、「やまたかみ」と濁って訓む
 説(新編古典文学全集)に従う。「夜麻陀加美(山高み)」「古事記・下(允恭)・歌謡」,「椰摩娜箇弥(山高み)」「日本書紀・允恭天皇二十三年三月・歌謡」。

要するに、この句の第三拍が、記紀の歌謡では「ダ」の仮名で書かれているというのである。

さらに続く歌を追ってゆくと、四箇所(1736, 1747, 1841, 4011)の「山高み」は、清音の「やまたかみ」に戻って読まれている。途中、巻第十一(2775)の初句の「山高」の原文にだけ「やまたかみ」の振仮名があるが、読み下し文にはそれが無い。いかにも不統一であり、ぶざまである。複数の人間による協同作業の欠点が露呈したのか、反省の意味をこめ

て告白する。

「山だかみ」には、ほかにも傍証があった。巻第十七、大伴家持の長歌「立山の賦」に和した、大伴池主の長歌の中ほど、第十九句からの六句を引き、当該箇所を太字の原文で示す。

立ちて居て 見れども異し **弥祢太加美** 谷を深みと
 落ちたぎつ 清き河内に (4003)

池主の他の作の仮名用法を細かく見ても、「太」が「ダ」の仮名であることに疑いはない。「山」と「峰」は紛れもない類義語なので、先の十例の「山高み」にも連濁形「山だかみ」を主張することが可能だろう。

山と峰ばかりではない。萬葉歌には「佐刀騰保美(里遠み)」(3988)の例があるので、「山だかみ」も、形容詞「山だかし」のミ語法と解釈できるかもしれない、と肥爪周二氏はいう。萬葉集には「伊敞籽保久(家遠く)しつ」(3715)もあることから、形容詞「さとどほし」も考えられるというのである。なるほどその可能性はありうるにしても、その複合に際して、後項の「高し」「通し」が、連濁形「だかし」「どほし」に変わる可能性をどのように論証したらいいだろうか。

そもそも、ミ語法「山を高み」の「を」「み」の語性自体がよく分からない。「み」が述語的な性質を有する接辞ではあるだろうが、上代日本語にそれに繋がるものを見いだすことはできない。六音句「山を高み」を五音句に整えるために「を」を捨てたとき、連濁して「だかみ」となる要因が、わたしは説明できない。かつて「を」間投助詞説が行われたのは、この句の意味が「山が高いので」と解釈できることから、「山ー高」が主述構文と見なされたからであろう。「を」格助詞説に拠るにしても、日本語文法における格支配の力は、主格が首位にあり、対格がそれに次ぐことは、上代以来変わらぬ原理である。ゆえに、その格助詞の表示は義務的ではなかった。「花さき、鳥うたふ里」「魚つり、藻刈る磯」には主格・対格表示の助詞はないが、それぞれ充足した表現である。かくて、何ゆえにここで連濁現象が生じたのか、わたしは遂に解くことができない。

5 春霞と朝霞

本節は、新大系版・文庫版の記述の矛盾や不統一ではなく、十分な自覚なしに書いたことが、連濁に関する事実を蔵

しているのではないか、ということについて書く。

「春にあらわれる霞、朝かかっている霞、それぞれを一語でなんと言いますか」と問われたら、人はどう答えるだろうか。無論、日常生活のことばではないので、わたしには歌語として「ハルガスミ」「アサガスミ」以外は思いつかない。だが、文庫版を第一巻から順に読んでいくと、ちよつと異なる訓に出会う。二つの歌を題詞つきで掲げる。

磐^{いはひめ} 姫皇后の、天皇を思ひて御作りたまひし歌四首（三首を略す）

A 秋の田の穂の上^{うへ}に霧らふ朝霞いつへの方に我が恋やまむ（88）

大伴宿祢駿河麻呂の、同じ坂上家の二嬢^{じじやう}を娉^{よほ}ひし歌一首

B 春霞^{かすが}春日の里の植糸^{こなきぎ}小水葱苗なりと言ひし柄^えはさしにけむ（407）

新大系版・文庫版とも、Aが連濁形「あさがすみ」、Bが不連濁形「はるかすみ」と振り仮名している。その根拠について、わたしども校注者間で議論した記憶はない。

『萬葉集總索引』による用例数は、「朝霞」八、「旦霞」一、「春霞」十八、いずれも連濁形「ガスミ」で、皮肉なことに

音仮名表記は皆無である。現行のテキストを見ると、創元社版の『新版新校萬葉集』[1977]は「あさがすみ・はるがすみ」でともに連濁形、櫻楓社版[1987]は「あさかすみ・はるかすみ」でともに不連濁形、塙書房版[2007]と和泉書院版[2008]は「あさがすみ・はるかすみ」で連濁形と不連濁形である。刊行が新しいほど、「朝霞」が連濁形、「春霞」が不連濁形と別れるようである。

ついでに注釈書やいかにと、先に「朝狩・夕狩」で参照した稲岡耕二氏の和歌文学大系『萬葉集』の第一冊を見た。読み下し文を掲げ、別掲原文の振仮名を括弧書きして添える。

A 秋の田の穂の上に霧らふ朝霞あさかすみいつへの方に我が恋あひ

止まむ(88) (あさがすみ)

B 春霞はるかすみ春日の里の植子水葱苗うゑこなびなりと言ひし柄えはさし
にけむ (407) (はるかすみ)

つまり、Aの「朝霞」に関して、読み下し文と原文とで振り仮名の清濁が異なるのである。稲岡氏は連濁か否かに関心がなかったのではないか。それは、多くの研究者や愛好者に一般的な傾向だろうと推測される。

この件について、手始めに『時代別国語大辞典上代編』を見ると、「はるかすみ」で立項し、用例の筆頭に、『歌経標

式』から「あをによし奈良山峡やまがよ白たへに此のたなびくは婆は留る可か須す美みなり」を挙げ、次いで萬葉集の用例「春霞」二点(789, 1464)を挙げている。「日本歌学大系」第一巻には、『歌経標式』の二つのテキストを「真本」「抄本」として収めている。誤写が多いとされる抄本を避けて、真本の本文を引用する。

阿呼爾與之 那羅夜麻可比與 旨侶他倍爾 己能他那婢
俱婆 婆留可須美那利

『歌経標式』は、光仁天皇の勅を奉じて藤原濱成が撰進した歌論書で、その時期は奈良時代末期の宝龜三年である。万葉仮名の用法には、時に配慮する必要があるとされ、右に引いた歌の第四句末と結句初頭の「婆」は清音仮名の用例である。歌学大系本で十ページ弱の量であるが、万葉仮名は「カ＝可」「ガ＝我」とはほ書き分けていたらしく、三十例ほどの内に清濁が明らかに疑わしい「可」は見当たらない。

「朝の霞」と「春の霞」、それぞれが複合するとき、なぜ連濁と不連濁とに分かれたのだろう。その経過を探るべく大型辞書の記述を見よう。『古語大辞典』(小学館 1983)は「はるかすみ」で掲出している。『角川古語大辞典』[1994]の見出しは「はるか／がすみ」と、清濁両形を掲げて異様である。

『日本国語大辞典』第二版〔2001〕の見出し下には「はるがすみ（古くは「はるかすみ）」とある。三十年ほど前から連濁形を併記するようになったようだ。

小型の古語辞典を見ると、『岩波古語辞典』第十二刷〔1986〕は「はるがすみ」で掲げているが、少し新しい『詳説古語辞典』〔三省堂 2000〕は、「はるがすみ」の見出しの下に、「〔「はるかすみ」とも〕」を加えている。『歌ことは歌枕大辞典』（角川書店 1986）の「春霞」の項には、古くは「はるかすみ」と呼んだとして、萬葉集以来の用法についての解説がある。このように見えて来ると、近年刊行される書物や辞書に、古くは「はるかすみ」であったという記述が見られることが分かる。

その背景には、『日葡辞書』がある、とわたしは推測する。日本イエズス会の長崎学林が刊行した、日本語とポルトガル語の対訳辞書、『VOCABULARIO DA LINGUA DE JAPAN』〔160304〕の日本語訳が、四百年を経て、『邦訳日葡辞書』（岩波書店 1980）として刊行されたからである。ローマ字で書かれた十七世紀末の日本語が、ポルトガル語を介することなく読めるようになったのである。それには『Farugasum. ハルガスミ（春霞） 春の靄・霞』がある。

ここに至っても、なお不可解なことがある。春の霞が不連濁形の「春かすみ」であったことなど、平安和歌の研究者には分かりきっていたはずである。古今和歌集の読み癖やアクセントなどを記したかなりの文献が残っており、その研究の蓄積も厚いからである。

古今集の声点を長く研究した秋永一枝氏の『古今和歌集声点本の研究』（校倉書房 1980）には、「はるかすみ」の文字列に、複声点すなわち濁音表示のある例は挙がっていない。竹岡正夫氏は『古今和歌集全評釈』（右文書院 1976）で、第三番歌「はるかすみたてるやいづこみよしののよしのの山に雪はふりつつ」に秋永氏の研究成果を引き、他の資料も加えて、「はるかすみ」の不連濁たることを指摘している。

では、古代の「はるかすみ」という語連続において、なぜ連濁が生じなかったのか。秋永氏の『研究篇 上』によると、「体言二拍+体言三拍」の語は、「あさ柏」から「ゆふつくよ」までの二十三で、「はる霞」も含まれる。この複合語の声点は「●○○○」である。○印は「低」のアクセント、●印は「去声点」で下降調を意味する。現在の京都方言などを聞いても分かるように、下降調の拍は、高や低の単独の拍より、少し長く発音される。つまり、ハルカスミでは、

「ル」が高く発音されてすぐに下降する。それを誇張すると、「ハルー（○○○）」とでも書けようか。「ル」は発音と同時に下降する。そのあいだに、発音のエネルギが減じて、次の拍「カ」を濁音に変える力がなくなっていたのだろう。

「カ」不連濁の「ハルカスミ」が残ったのは、かかる事情による、これが愚案である。

以上のような経緯で、連濁語「朝がすみ」と不連濁語「春がすみ」が成立したのであろう。

6 家持とホトトギス

大伴家持がホトトギスを殊に好んだことが、その作歌から知られている。萬葉集に見えるホトトギス百五十余の用例のうち、六十数例が家持の作だという。奈良時代、漢籍由来の知識で、ホトトギスは立夏に鳴くとされていたが、家持が越中の守であつた数年間、任地では飛來が遅く、その声を待ち焦がれる気もちが多く、ホトトギス詠を生ませた。

卷第十九に、天平勝宝二年四月三日、旧同僚、越前の判官・大伴池主に贈つたホトトギスの長歌と反歌三首から成る歌群がある。その第二反歌を掲げ、言及箇所を原文で残す。

ほととぎす聞けども飽かず網取尔捕りてなつけな離れず
鳴くがね (4182)

平明な歌で、従来ほとんど議論の対象になつたことがないと思う。ホトトギスをとらえて手元で冬を越させたら、鳴き声を早く聞くことができるのだが、という歌である。ここでは第三句について小さな問題を論ずる。

奈良時代、食用の野鳥であるカモ・キジ・ヤマドリなどは、弓矢、網、罟、トリモチなどを用いて、あるいは、それらを組み合わせて捕獲したことであろう。食用なので傷を負うことに神経質になる必要はなかつたはずである。一方、鷹狩用の鷹や隼、鶺鴒用の鶺鴒の捕獲には、できるだけ傷つけないように、細心の注意が注がれたようである。各種の専門書や百科事典によると、巣立ち前の幼い鷹を捉えたり、野生の成鳥を罟にしておびき寄せて網にかけたり、トリモチで捉えたりした。いずれにせよ、目当ての鳥は傷つけないように、いろいろな策を講じて捉えるのだという。

もはや思案するまでもなく、「網」と「捕り」の統辞関係は「網にて捕る」、すなわち《道具格―述語動詞》である。

《名詞―動詞「取り」》の複合語を考えると、「汗とり・舵とり・茸とり・草とり・早苗とり・蚤取り・蠅とり・婿とり・

虫とり」など、いろいろ思いつく。ここには比較的古い和語によるものを並べたが、連濁の法則のうちで、早く指摘されたのは、①「やまかわ／やまがわ」の《対等／修飾》の違い、②「おおぞら／おおかぜ」など《ライマンの法則》の関与、③「草取り」など《対格・動詞連用形》構造の三つではなかったか。

わたしが市民のための講話などで③としてまず例示するのは、「鮎つり・鮎つり・鯉つり」である。それに「夜づり・友づり・流しづり」を対比させるとよく分かる。「鮎つり」等、不連濁の複合語の前項は、すべて《対格・動詞連用形》の關係で成り立つ複合語である。ならば、従来この歌で行われてきた訓「網とり」は「網をとる」の意だということになる。それでいいのだろうか。

さまざまな注釈書・研究書を探索した結果、卓見に一致する読みを採る一書、橋千蔭『萬葉集略解』（1796）に出会った。辻本修學堂版〔1899〕には左記のようにある。

霍公鳥。雖聞不足。網取爾。獲而奈都気奈。可禮受
鳴金
ほと、ぎす、きけどもあかず、あみどりに、とりて
なつけな。かれずなくがね

網にて取るをアミドリと言ふ。ナツケナはナツケン
なり。ガネは設けて待つ詞。

そうなのだ。網で取るから「網ドリ」なのだ。「網トリ」なら、「網を取る」の複合名詞形と解釈するのが日本語なのであった。

なお、同書の寛政年間から文化年間に出版された版に依拠する日本古典全集版によっても、当該歌の訓の清濁に異同はない。

全く偶然なのだが、ある小さな集まりで話をする必要が生じて、かつて目にとめていた『太田晶二郎著作集 第三冊』（吉川弘文館 1982）を開いた。その第十四論文「四の数を忌むこと」は平安時代に溯る」の（一）は次のように始まっている。

ホトトギス、聞ケドモ足カズ、網取りニ獲リテナツ
ケナ、カレズ鳴クガネ。

夙に奈良時代、『萬葉集』の此の歌は、ホト、ギスを生捕つて飼つて、不断に聞かうとまで言ふのであり、（以下略）

「網取」をアミドリと読んだ人が一人殖えたと知って、わたしは同志の出現を喜んだ。この文章は、雑誌『日本歴史』

三十四号〔吉川弘文館 1951.3〕の「研究余録」欄に載ったエッセイである。博覧強記の太田氏のことだ、『略解』を読んでいたのかもしれない。

以上、まことに些細なことではあるが、「網取」の訓を「あみとり」から「あみどり」に変更しようとするものである。

7 記紀歌謡の連濁

本稿を構想したのは一年まえ。萬葉集の語彙に限って連濁の問題を論ずるつもりで、標題は「萬葉語の連濁について」を考えていた。だが、書き進めるうち、4の節に書いたミ語法に触れざるを得ず、考察の範囲を記紀に広げることになったのである。

近年、連濁論の専書や音節構造に関する著作の刊行が続くが、その対象領域は、まず現代語か室町時代語、または室町時代語から現代語までが大半である。『国語学大辞典』〔1980〕の「連濁」の項は、前身の『国語学辞典』〔1955〕と同じ奥村三雄氏の筆になる。それは、前書に比べて漢字音のからむ連濁に関する記述は充実しているが、平安時代以前に

ついてはさほどの変化がない。その原因はほぼ明白である。濁音を記す資料が乏しいからである。特に平安時代は仮名がきの濁音表示が少なかったので、全体的な把握は難しいのだと思う。

連濁の研究に有益な資料として、近代初期にはヘボンの辞書があり、中世末期には『日葡辞書』がある。平安時代の大きな辞書には『類聚名義抄』がある。だが、この辞書の濁音表示は緻密とは言えない。語彙数はそれなりにあるが、基本的に漢籍・仏書を読むための字書であって、和文・和歌などを読むにはさほど有益ではない。それでも中世・近代の連濁と比べると手がかりが得られるかも知れぬ、わたしはそう考えて、望月郁子氏の労作、『類聚名義抄四種声点付和訓集成』〔笠間書院 1974〕から、連濁とおぼしい訓を拾い上げる作業を試みた。望月氏が対象にしたのは、『類聚名義抄』に加えるに、『和名類聚抄』『法華経单字』『前田本色字類抄』『石崎本字鏡』である。一ページ四十語の六百三十八ページから得られた、連濁の考察に資すべき材料は、やはりと言うべきか、残念ながらと言うべきか、さほど多くはなく、それを材料にして考えることは諦めざるを得なかった。

万葉仮名で書かれた古代日本語の資料として先ず考えられ

るのは、古事記と日本書紀の訓注と歌謡である。その訓注のうち、古事記の四十余条は単純語が大半で、連濁を考える材料には適しない。日本書紀の三百数十条には複合語や句も含まれて少しは役だちそうに思えたが、連濁の考察に使えるような語句は得られなかった。かくて残ったのは古代歌謡、なかくづく記紀の歌謡である。

以下、日本古典文学大系本、土橋寛校注『古代歌謡集』〔95〕の釈文を基礎に置く。引用歌の下に括弧書きした番号は同書のもので、「記」は古事記を、「紀」は日本書紀を意味する。留意すべき箇所には、原文を残して掲げる。

初めに、古事記上巻の終り、火遠理命が豊玉姫に返した歌を見る。ローマ数字Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの下に、古事記・日本書紀・歌経標式真本のそれを掲げる。歌経標式の釈文は稿者による。

- Ⅰ 沖つ鳥 加毛度久鳥に 我が率寝し 妹は忘れじ
世の盡たに（記8）
- Ⅱ 沖つ鳥 軻茂豆句鳥に 我が率寝し 妹は忘れじ
世のこと（紀6）
- Ⅲ 沖つ鳥 可毛都久鳥に 我がるね旨 妹は和須禮旨
世のこと□□に（標式）

Ⅲでは、第三・四句の末尾に、「旨」が清音「シ」と濁音

「ジ」の仮名として用いられている。初句の「沖つ鳥」は「鴨」を導くと解し、Ⅰの第二句の「どく」は「着く」が連濁・転音したとする説が広く行われているが、わたしにはそれが受け入れられない。Ⅱの「かもづく」も甚だ怪しいと思う。細かい言及はしないが、ⅠからⅡへ、ⅡからⅢへと進むにつれて、語句のつながりも歌意も明快さが増していると言える。歌経標式の伝える歌は、奈良時代後期までに次第に合理化の進んだ跡をとどめるのではなからうか。

次に、古事記仁徳天皇条、磐之姫大后の嫉妬を伝える説話の中の歌謡を読む。

（五句略） つぎねふや 山城川を 川のほ沂り 我が沂れば
川の辺に 生おひ立てる（淤斐陀弓流） 鳥草さし樹を 鳥草

樹の木（以下九句略 記15）

「生ひ立てる」は省略された二句先にもある。なお、同じ状況に関わる歌が日本書紀の仁徳天皇卅年にあるが、歌詞が異なるので直接の比較はできない。

ここで分らないのは、複合動詞「生ひ立つ」の連濁である。動詞「生ふ」と「立つ」の等位複合の動詞なので、日本語史を通じて原則的には連濁しないはずである。『時代別国語大辞典上代編』は不連濁の「おひたつ」で立項し、右の古

事記の例と、萬葉集の「於お非多知ひたぢ」(四二二)を用例としている。一方、記紀歌謡にはかかる複合動詞の連濁した例が多く、「立ちた栄さかゆ」「取りと枯からす」「張りかり立つたつ」などがある。

最後に、古事記下巻の允恭天皇条、軽太子と軽嬢子の密通を語る説話群の歌謡の冒頭を見る。いずれも第三句以下を省略する。

天飛あまたむ(阿麻陀牟) 軽かる嬢をとめ子(記83)

天飛あまたむ(阿麻陀牟) 軽かる嬢をとめ子(記84)

天飛あまたぶ(阿麻登夫) 鳥つかひも使つかそ(記85)

記83は紀71に小異の形で見えている。

『古事記傳』以来、「だむ」は「とぶ」の音転だとする説が行われてきた。だが、新編日本古典文学全集『古事記』

〔1997〕は「天飛あまたむ」に異議を唱えて、「天廻あまたむ」を提示した。その根拠は記83の頭注で次のように書かれている。

「あまたむ」は「軽」の枕詞。天をかけめぐる意で「かり(雁)」と類音の「かる(軽)」にかかる。「天飛あまたぶ」から転じて「天だむ」となったとする説があるが、音変化としては考えにくい。

上代語の論理としては、こちらが断然優位に立ちうる、とわたしは考える。だが、萬葉集で「あまとぶや」の形で六つの

用例を有する枕詞が、記紀の歌謡には、何ゆえにかくも著しく音転した枕詞がありえたのだろうか。それを説かずして論証したとは言えまい。

以上、記紀歌謡の連濁らしい事象の三組を一瞥した。わずか二百ほどの歌謡に、このたぐいの難解の極みのような表現の満ちている現実がある。これらを正面から論ずる意欲も能力もわたしにはない。辛うじて萬葉集の歌の言葉を考えてお茶を濁してきたが、上代語全体を対象にしたら、それはまさにアポリアの大渦に身を投ずることを意味するだろう。

おわりに

本稿では次のことを述べた。

- 1 近年、連濁研究の成果が多く刊行されるようになった。その成果に学んで、萬葉集の連濁について考える。
- 2 「朝狩・夕狩」は「アサガリ・ユフガリ」と連濁形で読むべきである。
- 3 動詞「下延ふ」は不連濁形「シタハフ」、名詞「下延へ」は連濁形「シタバへ」と読む。
- 4 「山高み」は、記紀歌謡の用例によって連濁形「ヤマ

「ダカミ」と読んでおく。

5 「朝霞」は古代から「アサガスマ」であった。「春霞」

は、古代には不連濁の「アサカスマ」であったが、室町時代には連濁形「ハルガスマ」に転じていた。

6 ホトトギスを網で捕らえる「網取」は、日本語の統辞法に則って「アミドリ」と連濁形で読むべきである。

7 記紀歌謡の連濁は、萬葉集のそれとは異質といえるほど難解な世界である。

附記 本稿は、岩波文庫版『万葉集』の、他の校注者との協

議を経ずに書かれた。

——令和五年九月成稿 [2023] ——

(くどう・りきお 成城大学名誉教授)